

## 日本のマルコ・ポーロ、ペドロ・キベ・カスイの生涯

- \* ペドロ・キベは1587年、豊後の国、国東半島の岐部村、現在の大分県国東市国見町岐部で生まれました。この年に、伴天連追放令がだされたので、豊後のカトリック教会も厳しい状況に置かれていました。  
父はロマーノ・岐部、母はマリア・ハタと言ひ、両親共敬虔なカトリック信者でしたので息子もその信仰を受け継ぎました。兄弟は二人、ペドロの他にルフィーナ何某と結婚したホアンという弟が長崎に居たようです。
- \* 1600年、徳川時代始まりの年、幼いペドロ・岐部は、13歳で有馬のセミナリオに入学しました。これは、ポルトガル、スペインからやって来たイエズス会の宣教師達が建設したもので、生徒たちの起床時間は、午前4時半、冬は5時半。先ず朝の祈りから始まりミサへの参列そして朝食。9時からラテン語、日本語の読み書きの授業。11時昼食。午後は3時から4時までラテン語の別の課目の授業。クラシック音楽の授業もあり、ビオラやクラビコードなど楽器演奏も学びました。  
ヨーロッパ渡来絵画の模写を中心とする美術の授業もありましたが、当然 教育の中心は聖書に基づく神学教育で日曜は安息日でした。
- \* ペドロ・キベは、セミナリオを1606年に卒業すると、イエズス会入会を申請しますが、直ぐには認められませんでした。そこで入会が認められるまで絶対にあきらめないと誓った私的誓願書を記しそこに“ペドロ・カスイ・キベ”と署名しました。なぜ自分の名前にカスイを付け始めたのかは分かりません。
- \* 彼はセミナリオ卒業後8年間、筑前の国甘木、秋月の島で、神父の手伝いをする“同宿”として働いていましたが、あるとき秋月教会の司祭で殉教したマテオ・シチロオエイの遺骨を長崎まで持って行く任務を任されました。  
そんなこともありペドロ・キベのイエズス会司祭になりたい気持ちは抑えがたいほどにたかまりました。
- \* 遂に、1614年日本から追放された宣教師達に混じってマカオに渡りました。その神学校で神学を学び終えたら司祭にしてもらえるだろうと考えたのです。
- \* そこで マカオの神学校では、ラテン語と神学の勉強に一層打ち込みました。  
処が、当時、その学校には、日本人に対する差別意識が強く存在し、いくら頑張っても日本人は司祭にはなれないことを、彼をはじめ日本人神学生たちは気付きました。そこでペドロ・キベは、マカオの学校を退学します。  
これからどうすべきか。日本へ帰国すべきか、それともマニラかゴアへ行くべきか考えました。結局ローマへ行ってイエズス会に入会しそこで司祭にしてもらおうと決意しました。
- \* 茲から、マルコ・ポーロとは逆方向に向かうペドロ・キベの巡礼の旅が始まります。  
マルコ・ポーロは、物質的富や交易をもとめてヨーロッパからアジアに向って旅を

しますが、ペドロ・キベのほうは、アジアからヨーロッパのローマに向けての旅でしかも物欲を一切捨て精神性の高い理想を追っていました。

彼の行程は、先ずマカオからマニラへ行き、そこからマラッカに向いそこでサンパウロ神学院に宿泊。そこからセイロンとインドの間にあるコモリン岬を通りインドの沿岸に沿って昇りコチンを経てゴアに到着。ここまでは船旅です。当時ゴアは、ポルトガル領インドの首都で、フランシスコ・ザビエルの時代から、そのサンパブロ神学院は隆盛を極め、イエズス会の精神に燃える現地インドの若者たちを受け入れていました。

- \* ここゴアから、ペドロ・キベの徒歩によるシルク・ロードの旅が始まります。シルク・ロードの前半は中国が起点なので、彼は後半を歩いたこととなります。

ヨーロッパに向けて徒歩での第一歩を踏みだした彼は、先ずパキスタンを横断し、ホルム海峡を抜けペルシャのエスタファンに入りイラクのバクダット、シリアのダマスカス、ヨルダンを通過し、遂に日本人として初めてエルサレムに到着しました。茲で彼は、深い思いを込めて“十字架の道”を歩きました。これは、キリストが十字架を背負い磔刑に処せられたカルバリーノの丘までを歩いた細い小道です。傷つき血のにじんだ足で、これからはるか“聖地”ローマに向って歩く彼にとって十字架の道は大いなる心の支えになったに違いありませんしまたこの大事業達成に向け彼の心を更に奮い立たせてくれたことでしょう。

- \* イエスキリストの生誕地、ベレンにも立ち寄りました。そこからパレスチナの北に歩みを進め、ガリレア湖を遠望、ハイファから船でキプロスへ向かい、クレタ島の横を回ってアドリア海に入りイタリアのトリエステに上陸。そこからベニス、ボロニャ、フェララ、シエナを通してローマに到達しました。“永遠の都”ローマまでの苦難の旅は実に3年に及びました。

- \* その間の詳細な行程を知ることはできません。日記の類は一切ないからです。おそらく、シルク・ロード後半の道順を辿ったものと思われます。従って果てしなく続く砂漠を横切り、山また山を越え、聞いたこともない言葉話す人々の中に入り、時にはキリスト教徒に敵愾心を抱く人々に囲まれ、将に死の危険と隣り合わせの旅であったことでしょう。然し、イエズス会員になりたいとの強い決意が、いつも彼に勇気と力を与えてくれました。

- \* 1620年5月、ペドロ・キベは、ローマのイエズス会本部に出頭します。本部長のムジオ・ビテレッチ神父は、彼が語る日本からマカオそしてローマに至るまでの長い苦難に満ちた旅路の話に耳を傾け、大いに感動しました。

- \* そこで、ビテレッチ神父の推薦で、ローマ教区司祭養成所に入りました。その後、イエズス会士達の審査を受け、司祭としての適性と学識を充分備えていると認められました。この結果、1620年11月15日、ペドロ・キベは、ローマの聖フラン・レトラン大聖堂で司祭に叙階されました。年齢32歳でした。

\* その5日後、聖アンドレア・イエズス会修練院に入学が認められました。この教会は有名な彫刻家兼建築家ベルリニ設計による大変優美な建築物です。

\* ペドロ・キベは、イエズス会入会申請に際し、次の6点を書面で表明しました。

1. 姓名。ペドロ・カスイ 父ロマーノ、母 マリア 生誕地ブンゴ（日本）  
33歳
2. 信仰心について。毎朝、ロサリオの祈り、聖人への祈りを捧げ土曜日は断食を実行しています。
3. イエズス会士希望について。 自分の自由意思で決定しました。 14年前に文書でポルトガル・マスカレニャ神父へ申請しました。
4. 身体状況について。 身体は健康で、課せられるいかなる労にもたえうる体力があります。
5. 神から授かった才能について。多くの才能を神から授かっていると思います。神は、艱難辛苦の旅で私を試されたのち、私をイエズス会に導かれたものと思います。
6. 聖職につくことについて。 満足しています。 私自身を含め、より多くの人々を救いに 導くことが出来る強い自信があります。

署名 ペドロ・カスイ・キベ

\* 1622年3月12日、イエズス会創設者イグナチ・ロヨラと日本を訪れた最初のイエズス会士フランシスコ・ザビエルの二人が、ローマ法王により聖人に列せられる式典が、サンペドロ大聖堂で行われ、ペドロ・キベは、神父としてその式典に参列しました。

おそらくこの式典で、日本での布教に尽力したフランシスコ・ザビエルの思いに共鳴し、日本での福音の気持ちに火が付いたのだと思います。

\* そこで、ペドロ・キベ神父は、直ぐに帰国することにしました。本部長に帰国申請し許可されます。修練院で2年の養成期間を終えずに、日本へ向け旅立ちました。帰国の旅は、予想よりはるかに日数のかかるものでした。

\* 先ずローマからチビタベッキオ港へ行き、そこから船で、ジェノバ、スペインのバルセロナまできます。

茲では、ベネディクト派のモンセラ修道院に立ち寄りました。なぜなら 茲で、イエズス会創始者イグナチ・ロヨラは、褐色のマリア像の足元に戦いの剣を捨てキリスト者になったからです。

\* 茲から、サラゴサ経由マドリッドまで行き、そこからエボラ、コインブラ、リスボンまで来ました。リスボンでは、修練院の審査を受け合格、イエズス会士として初めて清貧、純潔、従順の誓いをしました。リスボンからは、20人の他のイエズス会士と共にインドに向け出発し、翌年 喜望峰を通り、モザンビーク経由でゴアに

到着しました。

- \* 帰国を決意したものの、当時日本ではキリシタン追放、宣教師の入国禁止令が布かれていたので、入国出来たにしても殉教する危険性高く、帰国実行は、並大抵のことでないことが、分かりました。
- \* 先ずは、日本へ連れて行ってくれる船を見つけること自体が大変でした。そこで、ゴアからマラッカ海峡を通り、シンガポール経由、タイ湾を遡り当時のシャム王国のアユタヤに寄港。そこから漸くマカオまで来て、最後のマニラまで何とかたどり着きました。すべての寄港地では、日本へ行く舟がないか必死で探しました。
- \* 万策尽き果てたところで、日本人で帰国を希望するイエズス会マツダ神父と出会い二人は、1630年遂に一隻の小舟を手に入れました。これを遠洋航海に耐えうる様出来る限りの補強を施して、日本へ向け船出をしました。
- \* シチトウ海峡まで到着、九州薩摩の海岸まであと2~3日というところで嵐に遭い、岩床の切り立った岩に叩きつけられ船は木端微塵。二人は海に投げ出されますが、幸い土地の漁船に救助され鹿児島まで連れて行ってくれたので、九州の南端、坊の津に秘かに上陸することができました。
- \* すぐさま二人は、長崎へ行きその宣教師たちにこれから何をすべきか相談することになりました。キベ神父は、ローマに向け日本を発ってから実に16年ぶりの帰国でした。
- \* 長崎で、二人は、想像以上にキリシタン迫害が厳しいことを知りました。新任の長崎町奉行は、管轄地区のキリシタン絶滅を決意していました。長崎のイエズス会の長は、アントニオ・イシダ神父でしたが、既に6か月前にアグスチノ神父や他の宣教師達と一緒に捉えられ牢獄に入っていました。従ってもはや長崎やその近郊には、以前のように活躍している日本人神父は一人もおりませんでした。日本管区長マテオ・デ・コロ神父は重い病にあり死が間近だったので、後任管区長にクリストバル・フェレイラ神父を当てることにしていました。
- \* その後の2~3年キベ神父がどのような活動をしたのか 十分な資料がないのでその詳細は分かりません。  
1634年、フェレイラ神父は、捕えられ逆さにしての穴吊りの拷問にかけられました。数時間に及ぶ拷問で、フェレイラ神父は遂に棄教しました。  
多分その頃キベ神父は、長崎を離れ本州に向い、東北まで来てそこで1639年捕えられるまで布教に努めたようです。
- \* 東北での布教は、フランシスコ会の神父たちが1611年に始め、大きな成果を上げておりました。然し島原の乱の後、幕府は日本全国に亘りキリシタン弾圧を強め、この北の地にもその手が伸び、徹底的に迫害しました。
- \* キベ神父が、この地に着たころは、まだ6人の神父が活動しておりそのうち二人は

イエズス会でポロ神父とシキミ神父と言いました。

当時、外部との連絡が全く取れない状況でしたので、キベ神父の晩年の具体的布教活動は分かりません。唯一はっきり言えることは、クリシタン之家に隠れているのが見つかり 1639 年仙台で捕えられたということです。

- \* 此の時期に関するイエズス会の資料が乏しいので、日本側の記録により、キベ神父最後の数日の状況が分ります。

それによるとキベ神父は、最後はミワケ現在の水島にいたようです。イエズス会ポロ神父、シキミ神父、キベ神父の三人は、江戸へ送られ最高評定所で詮議されることになりました。将軍徳川家光も自ら立ち合い直接尋問し、その後三人の詮議は直属の部下井上筑後之守に一任することとしました。

- \* その後 10 日間に亘、井上は、三人の神父を棄教させようとあらゆる手を尽くし説得に努めましたが、叶いませんでした。万策尽き果て遂に、三人を“穴吊るしの拷問”“にかけることにしました。これは、井上自身が考案したという酷いもので、身体を縛り、汚物の臭気に満ちた穴の中に逆さつりにし、耳を切り落とし、下がってくる血を滴り流すというものでした。ポロ神父、シキミ神父とも、そのあまりに残酷な拷問の苦しさに耐えられず、棄教しました。

- \* 然しキベ神父は、逆さ釣りのまま敢然とこれに耐え抜きます。それだけではありません。隣で同様に穴吊りにされている二人に向って、頑張れと励ましたほどでした。牢屋奉行の配下の者たちは、頑強に抵抗しているキベ神父に業を煮やし、穴から引き出し槍で突き刺し絶命させました。1639 年 7 月 4 日 享年 52 才でした。

- \* キベ神父の最後を家光へ報告した井上の直筆文が、今 皮肉にも キベ神父の記念碑に彫り込まれています。それにはこう記してあります。「キベ ペドロ コロビ不申候。ツルシコロサレ候」

厚い信仰心に燃えアジア、ヨーロッパの国々を巡り歩いたペドロ・キベ神父は、かくして殉教者の冠を授かりました。

- \* 現在 大分県国東市岐部国見にセッキ神父がつくられたキベ神父記念公園があり、その中央には、彫刻家船越保武になるキベ神父の像が立っています。
- \* 2008 年 11 月 24 日、キベ神父は、他の 187 人の殉教者たちと共にカトリック教会の福者に列せられ、長崎スタジアムで行われたその式典には 3 万人以上の人々が参列しました。187 人は、1603 年から 1639 年の間に殉教した神父、信徒、そしてクリシタンに好意を寄せた市井の人達でした。
- \* キベ神父の生涯は、遠藤周作の小説になり、其れが戯曲化され芝居やオペラ、テレビ番組でも放映されました。
- \* ペドロ・キベ神父(1587～1639 年)、ベルナルド・デ・カゴシマ(1534～1557 年)は二人とも初めての日本人イエズス会会員です。支倉常長(1571～1622 年)は初めての日本の遣欧外交使節です。

これ等三人は、その海路陸路の道中で激しい嵐や幾多の自然の脅威に遭遇しました。また、全く聞いたことのない言葉を話す人達、敵愾心を露わにする人達、冷ややかな目で見ると人達。そのような人達のいる異国の国々を旅しました。然しこの三人は、それらに果敢に立ち向かい、東西往復の大挙を成し遂げた英雄達です。その生き様は、神の手に身を委ね、何があろうと絶対に諦めず自分の理想を追求し、果敢に強く生きると、私たちに励ましているのではないのでしょうか。

ファン・カトレット S.J